

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02231

研究課題名(和文) 芸術と日常生活の融合に関する戦後史研究：消費文化の視点から

研究課題名(英文) Postwar Art History on Fusion of Art and Daily Life from the Perspective of Consumer Society

研究代表者

加藤 有希子 (Kato, Yukiko)

埼玉大学・教育機構・准教授

研究者番号：20609151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、芸術と日常生活の融合が、実際には困難を極めることを、次の視点から明らかにした。新印象派が信奉していたアナーキズムと幸福の観念が、美の追求とは一致しえないこと。各地の芸術祭(さいたまトリエンナーレ2016、2017年の欧州での三つの芸術祭)の観察を通じて、日常生活と芸術の融合が、政治もしくは経済の問題に転嫁されていくこと。芸術と日常生活の融合は、例えば「毒」を導き入れるような荒療治が必要なこと。「毒」は生死にかかわる「関心性」を芸術に注入する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

私達は芸術と日常生活の融合を夢想する。「日常生活に芸術が溢れていたら素晴らしい」、「芸術が日常生活者にも近づきやすかったら、もっといい」。しかし本研究は、実際には両者が歩み寄る難しさを示した。そうしたことは、2020年に始まるコロナ禍などの厳しい芸術環境において、補助金などを芸術につき込むことが、人々の賛意を得られないことから分かる。しかし本研究はそうした相矛盾する芸術と生活の間に、「毒」のような架け橋も存在することを明らかにした。今後、さらなる研究が俟たれる。

研究成果の概要(英文)：This research revealed that the fusion of art and daily life is extremely difficult from the following viewpoints. The idea of anarchism and happiness that the Neo-Impressionists believed in cannot match the pursuit of beauty. Through observing art festivals in various places (Saitama Triennale 2016, the three art festivals in Europe in 2017), the fusion of everyday life and art will be passed on to political or economic issues. The fusion of art and daily life requires, for example, a rough cure that can lead to "poison". "Poison" injects life-threatening "interest" into art.

研究分野：美術史、美学、表象文化論

キーワード：芸術と日常生活の融合 新印象派 アナーキズム 芸術祭 毒

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当時、美学で始まったばかりの生活場所(ピオトープ)の研究

美的関心の無関心説を提唱したカントから始まり、20世紀以降も、P.ビュルガー、A.ダントー、P.ブルデュー、C.ピシヨップらは芸術と日常生活が乖離しているからこそ、芸術の存立が保たれているとの説をとる。しかし尼崎彬(2012)の言葉を借りるなら、近年は芸術と日常生活の境目が融解し、「芸術のための芸術」という芸術の自律性が崩れ、芸術に日常的な生活関心を導き入れる「人生のための芸術」が広がっている。これを西村清和(2007-2010)は美学における「ピオトープ」の研究、とりわけ環境美学や分析美学の立場から明らかにしようとしてきた。これに類する研究は、鶴見俊輔(1991)、Donald Kuspit(1996)、Andrew Light(2005)、Yuriko Saito(2007)などがあるが、その焦点は遊戯、健康、風景、道徳などばらばらで、芸道などの前近代の話題も含み、史的な体系性を欠いている。

コミュニティ・アート研究は当事者研究が多く、批判力を欠いている

芸術と日常生活の融合に関して、美術史界ではコミュニティ・アートの研究が最も進んでいる。熊倉敬聡(2000)、平田オリザ(2001)、Jono Bacon(2012)、Michael Ruthdon(2013)、中村政人(2013)、熊倉純子(2014)などの優れた研究があるが、いずれも事業に携わる当事者研究であり、批判力を欠いている点が否めない。コミュニティ・アートは社会を活性化している点多々あるが、ピシヨップ(2004)も指摘するように、そのコミュニケーションは同類の中間のなれあいになりやすく、健全な民主主義がもつべき「反目 antagonism」を欠いている。応募者は、とかく社会と迎合しやすい現代アートにおける芸術と生活の融合を、当事者としてではなく研究者として冷静に見つめ、その長所だけでなく短所も的確に指摘したいと考えた。

2. 研究の目的

上述のように、昨今では19世紀以来隆盛した「芸術のための芸術」が、「人生のための芸術」になりつつある。上述の先行研究では、遊戯、健康(体操や踊りなど)、風景の機能、道徳と美、また各地の芸術祭の隆盛を明らかにしてきた。しかし一方で、それらの「人生のための芸術」の芸術としての質の低下は否めない点があった。たとえば同情や涙などを極端に誘う芸術が、ソープオペラ化して、芸術としての質が十分でないことや、各地の芸術祭で出品される作品が、街の日常と同化してしまい、芸術として同定できないなどの事例である。本研究は、こうした事例から自然と沸き起こる疑問、すなわち「芸術と日常生活は本当に融合しえるのか?」「芸術と日常生活の、平和な結婚というのはいりうるのか?」という疑問に答えようとするものである。

3. 研究の方法

本研究は、主に三つの領域から、芸術と日常生活の融合の実態を明らかにし、そこでの芸術活動が、美的体験を提供するという点で、実効性があるのかを考察した。

19世紀末のフランス新印象派が信奉していたアナーキズムと幸福の観念が、彼らの美学とどう関係づけられるかを、美術史的、政治史的に考察した。本研究は、「戦後史研究」であるが、新印象派のアナーキズムは、20世紀、21世紀の中道左翼やエコロジストの論者と極めて近いことがあり(そのことは研究代表者の『新印象派のプラグマティズム』(2012)で明らかにした)、トピックとして選択した。

国内外の芸術祭(越後妻有トリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、愛知トリエンナーレ、さいたまトリエンナーレ、2017年の欧州でのミュンスター彫刻プロジェクト、ドクメンタ

14、ヴェネツィアビエンナーレなど)の観察を通じて、日常生活と芸術の融合が、どのように夢想され、そして実際にはどのように融合したのかを、美術史的に明らかにした(その結果、両者の融合は実際にはかなり困難であることが示された)。

2018年度までの研究成果から、芸術と日常生活の融合は、かなり困難を極めることが明らかにされた。しかし実際には、人々はたえず、「芸術が日常生活と密接にかかわるといい」「日常生活が芸術に彩られればいい」と夢想する。そこで本研究では、両者の融合の可能性として、「毒」のような致死的で刺激的な要素を入れることで、両者の融合が可能になるのではないかと仮説を立てた。

4. 研究成果

本研究は、結果として、芸術と日常生活の融合が、実際にはわずかな例外を除いて、困難を極めることを、次の視点から明らかにした。

新印象派が信奉していたアナキズムと幸福の観念は、現在の中道左翼の平等主義の原点ともいえる。そこで描かれる世界観は、ポール・シニャックの『調和の時』(1895)のように平和で美しく、牧歌的である。しかし美が本来持つ、厳しさや完璧主義、向上心、飛躍のような冒険的な要素はない。このような挑発的な要素は、ロマン主義的美学の残滓ともいえるが、実際にはこうした冒険的要素を欠いた美は退屈でもある。その点で、新印象派の美学は、その頂点において、終焉を迎えていた。

国内外の芸術祭(越後妻有トリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、愛知トリエンナーレ、さいたまトリエンナーレ、2017年の欧州でのミュンスター彫刻プロジェクト、ドクメンタ14、ヴェネツィアビエンナーレなど)は、近代芸術において私達が抱いてきた「芸術と日常生活の融合」を叶える実践である。しかし実際、それらのアートを経験してみると、それは欧州の場合、芸術が政治問題に転嫁される事態が、そして日本では芸術が地域振興などの経済の問題に転嫁されていくことが明らかとなった。芸術が芸術として、生活圏で成り立つのは難しく、それこそまさに「人生のための芸術」なのだが、そうした芸術は、もはや人生のためにもなりにくいことが実感された。各地の芸術祭は、あいちトリエンナーレ2019のように、政治問題などを強くクローズアップすることで、新たな力を得ているが、しかしそこに芸術性が残されているかは、考察の余地がある(本研究では、芸術の経済化、芸術の政治化が極端に進むと、芸術が無効化する可能性を示唆した)。

本研究は、そこで2019年度からは芸術と日常生活の融合を叶える、ごくわずかな可能性として「毒」に注目した。例えば芸術に比喩的な意味の「毒」を導き入れることにより、アートの力は増してくる。例えばブリジット・ライリーのオブ・アートは、1960年代にドラッグを吸引しながら見ることが流行したり、1960年代から80年代のパフォーマンス・アートは暴力が美的価値の核となったり、オルダス・ハクスリーや安部公房の物語では、麻薬やドラッグが異世界を創り出す。芸術はカント以来、「無関心性」を軸に鑑賞されるようになったが、「毒」は生死にかかわる「関心性」を芸術に注入する。芸術と生活のなれ合いで、ぬるま湯のようになった美に、生死にかかわるような強い関心を注入するのは、まさしく毒なのかもしれないと示唆できた。

2020年からはコロナ禍で、芸術界もアポカリプス的な状況に置かれているが、そのことは逆に芸術の生命を吹き替える可能性すら示唆している。しかしそれについては、今後の研究を俟たねばならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 加藤有希子	4. 巻 N/A
2. 論文標題 「ライリーとスーラ、日本的あるいは生命と非生命のあいだで」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ゆらぎ プリジット・ライリーの絵画』展図録	6. 最初と最後の頁 145-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 加藤有希子	4. 巻 N/A
2. 論文標題 「毒から抗鬱剤へ 毒と悪意のない世界は可能か、アートから考える」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 吉岡洋編『Poison Rouge』	6. 最初と最後の頁 42-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤有希子	4. 巻 21
2. 論文標題 「芸術祭の時代 政治か経済か、変わる芸術の役割」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『芸術学』	6. 最初と最後の頁 72-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko KATO	4. 巻 48
2. 論文標題 “Silent Radicals: Report on The Saitama Triennial 2016, Japan,”	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Association for Aesthetics Newsletter,	6. 最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 加藤有希子	4. 巻 N/A
2. 論文標題 「障害者、補助機器、バリアフリー・・・そしてアート」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館大学生存学研究センター監修・渡辺克典編『知のフロンティア 生存をめぐる研究の現場』	6. 最初と最後の頁 74-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有希子	4. 巻 第52巻第2号
2. 論文標題 「今、私たちはアートに何を求めているのか さいたまトリエンナーレ2016サポーターアンケートを軸に考える」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要 (教養学部)	6. 最初と最後の頁 107-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Kato	4. 巻 21
2. 論文標題 The Border Between Art and Life: Reconsidering Neo-Impressionism within the History of Deconstructing Art	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aesthetics (国際版美学)	6. 最初と最後の頁 97-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有希子	4. 巻 2
2. 論文標題 オルダス・ハクスリーの挑戦 一箱にも入らずカリフォルニアで堂々と	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ボワゾン・ルージュ	6. 最初と最後の頁 49-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤有希子
2. 発表標題 「ライリーとスーラ 21世紀を考えるヒント」
3. 学会等名 DIC川村記念美術館（「ゆらぎ ブリジット・ライリーの絵画」展（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤有希子
2. 発表標題 「毒から抗鬱剤へ 新印象派、ライリー、毒と悪意のない世界へ？」
3. 学会等名 公開講座「芸術と＜毒＞」（京都大学こころの未来研究センター）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤有希子
2. 発表標題 「生命と非生命のあいだで：児玉幸子の黒、ブリジット・ライリーのピンク」
3. 学会等名 シンポジウム『色彩×日本的感性×メディア』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤有希子
2. 発表標題 新印象派のファルマコンあるいは新しい時代の幕開け
3. 学会等名 「ファルマコン 医療とエコロジーのアートによる芸術的感化」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤有希子
2. 発表標題 この世の毒とアーティストの使命 –マイルド化する社会で
3. 学会等名 トーキョーアーツアンドスペース (TOKAS) シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤有希子
2. 発表標題 オルガス・ハクスリー試論 –箱にも入らずカリフォルニアで堂々と
3. 学会等名 「ファルマコン、生命のダイアログ」シンポジウム (京都大学こころの未来研究センター)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考